

要約

日本労働政策研究・研修機構の2012年の『大都市の若者の就業行動と意識の展開—第3回若者のワークスタイル調査』によるとフリーター期間が6ヶ月以内で正社員になれた割合は64%であるのに対してフリーター期間3年超になると48.9%になることが分かった。正社員になれないということは低所得(厚生労働省 2013)男性の場合、結婚したくてもできないという未婚のリスクを高めることも意味する(総務省統計局 2015)。フリーター期間の長期化はさらなる長期化を招き人生全体に大きなリスクを与えていくのだ。

本研究の目的は、このような問題意識を背景にフリーター期間が長期化しやすい夢追い型フリーター芸能指向型であるバンドマンに着目し、「バンドマンは、なぜフリーターでバンドを続けるのか」明らかにしていくことである。

フリーターが生み出される背景の先行研究には、生活構造論から語られるものがある。部落解放・人権研究所(2005)は、経済的困難や困難な家族関係を持つ家庭で育った若者たちが、ジェンダー社会化の罨、「遊び」という誘惑、学校の勉強や進学へのサポート不足といった要因と絡みながら低学力・低学歴が進み不安定就労へと変換されていくプロセスがあると明らかにした。また、新谷(2002)は、経済的困難や困難な家族関係を持つ家庭で育った若者たちが家庭・学校からの離脱を経て、下位文化をもつグループに所属していくこと、さらにその下位文化はフリーターと適格的であり、そのグループに所属し続けるために若者たち自らフリーターを選んでいくことを明らかにした。

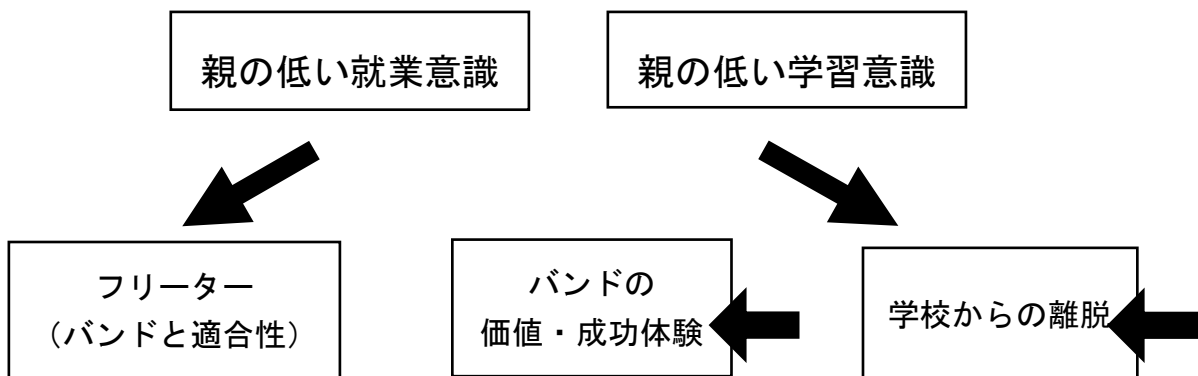
以上の先行研究を踏まえて、本研究では、2018年8月から2019年11月までの約1年間フリーター状態でバンド活動を行っている者を対象に、ライフヒストリーの聞き取りを行った。

本研究では「なぜ、フリーターを選ぶのか?」と「なぜ、バンド活動を続けるのか?」という2つの問いに分けて分析を行った。

最初に「なぜ、フリーターを選ぶのか?」である。まず、バンド活動とフリーターの適合性がある。バンドマンたちは、一様に「音楽活動(ツアーやライブ)で県外に行くことが多いので、時間の融通が利くフリーターの方がいい」といった理由でフリーターを選んでいく。しかし、聞き取りを行っていくと、バンド活動をするためにフリーターを選ぶ3つの要因があることが分かった。まず、親の低い就業意識がある。バンドマンたちの親は「食べれたら仕事はなんでもいい」「やりたいことをすればいい」といった低い就業意識を持っている。この低い就業意識は子どもに受け継がれ、フリーター選択への否定観を無くしていく。次に、親の低い学習意識がある。バンドマンの親は子どもの勉強について自由放任的な態度、更には無関心な態度を見せるといった低い学習意識を持っている。この親の低い学習意識は子どもに受け継がれ学校からの離脱(学力不振・不登校・中退)を招く。最後に、学校からの離脱とバンドの価値・成功体験がある。学校からの離脱は、進学や就職の結節機関としての学校の機能を不全にし、バンドの価値や成功体験を強化し、バンド

活動をより行いやすいフリーターを選択することを助長する。

バンドマンがフリーターを選ぶ理由



次に「なぜ、バンド活動を続けるのか？」である。聞き取りを行っていくと、バンドを続ける3つの要因があることが分かった。まず、学校からの離脱とバンドの価値・成功体験である。学校からの離脱を経験しているバンドマンは他の職業への接近性が低いため、バンドの価値・成功体験を強めていくことがある。結果として、これはバンドを続ける要因になっていく。次に、音楽関係者（メンバー・エンジニア・ファン）の存在がある。バンドマンからは「待ってくれてる人（ファン）がいるから辞めれなかった」「メンバーに迷惑をかけたくないから辞めれなかった」という語りがあった。最後に、バンドマンとバンドマンの世界が持つ文化の親和性がある。バンドマンの世界の文化には、刹那性（やりたいこと意識・飲酒）、リスク感覚の欠如、社会規範から逸脱した意識・行動がある。そしてこのような文化を「面白い・バンドをする理由」として上げるバンドマンの語りがあ

バンドマンがバンドを続ける理由

